



子どもの6分の1 — 6人に1人が貧困状態に陥っているといわれる現在の日本。この連載では、その6分の1の子どもたちの現状と、この地域で「子ども貧困」の解決に取り組む団体の活動をご紹介します。

すべては一人ひとりの未来のために — 『一般社団法人 愛知PFS協会』代表理事 星野 智生 —

大切なものは目に見えない

「子どもの貧困」

この話題が上がる度に、一定数の間違った（足りない）解釈をしている場面に出くわすことがあります。その1つが、貧困率の示しているもの。ほぼ100%の割合で、子どもの貧困問題が話される時は「相対的貧困※1」を指しています。しかし、その中に「絶対的貧困※2」をイメージして話を進めてしまっているケースが少なからずあります。

「スマホを持っていて何が貧困だ」

「旅行に行っているじゃないか」

「お肉を食べたらしいぞ」

貧困家庭の子どもはこういった行為も許されないのでしょうか？中には塾に通っている子どももいます。その背景には親が自分にかかるお金を極端に減らし、節約に節約を重ね、子どもには必要以上の我慢をさせたくないと思い必死に頑張っている姿があるのも事実です。しかし、その姿は決して表には出てきません。『大切なものは目に見えない』。これは、ぼくの大好きな小説にある一節です。すべての問題や課題の本質は目に見えず、そして声にできないことが多いのかもしれない。

そんな中で愛知PFS協会では不登校やひきこもりをはじめ、虐待、DV、ネグレクト、触法、いじめ、ホームレス、自殺未遂、リстокット、性犯罪、薬物依存、そして

貧困問題など10代のあらゆる問題課題と向き合ってきました。そんな子どもたちの多くに共通して言えるのは、「大人を信用していない」「未来へ希望が持てない」「自分を大切にできない」など、本当に悲しくなる想いの現状です。

彼らに本当に必要なものは、特別な支援ではなく、いつもそこにおいて自分を見捨てない普通の大人や、影ながら支えてくれる大人たち（社会）ではないかと思えます。

私たちの活動

大きく分けて4つの自主事業と2つの委託事業を行っています。

学びの場や居場所としての「フリースクール」、生活保護世帯や困窮世帯の子どもに対し、独自の補助制度を設け授業料を軽減し運営している「通信制高校サポート校（名古屋みらい高等学院）」、障害を持つ子どもの成長をお手伝いする「障害児通所支援（アフタースクールPFS）」、そしてここまでとり着くことができない子どもやその家族の元へ直接介入していく「訪問支援（アウトリーチ）」です。

また、名古屋市からの委託事業として「中学生の学習支援事業」を4区7箇所で行うほか、ニートやひきこもりの支援をメインとする「若年者自立支援ステップアップ事業（北部）※3」を行っています。

これらの活動すべてにボランティアが関わっており、ボランティア抜きで子どもたちの成長を考えていくことはできなくなっています。ボランティアによるインフォーマルな支援は、時として専門性の高い支援を凌ぐ効果を発揮しており、子どもが求めていることは、まさに人と人との計算されない単純な関わりなのだと痛感させられます。

誰もができること

「『何もしてあげられないけど話なら聞かからね』と言ってくれたのが嬉しかった」

「何も言わずに隣にいてくれたことが嬉しかった」

「分かってしてくれる大人もいるんだってことに気付いた」

「無視してたのに、毎回挨拶してきた〇〇さんに根負けした」

これらはすべて子どもからボランティアの皆さんへのメッセージです。

人はひとりでは生きられません。ならば人との関わりは生きる意味そのものなのかもしれません。そして関わり方は人それぞれ。個性や多様性を理解し関心を持ていくことは誰もができることだと思います。それがもしかしたら子どもの貧困問題を解決する糸口になるのかもしれません。

子どもが野菜を食べないとしたらどうしますか？

この質問は初回のボランティア研修の中でする質問の1つです。いろいろな案が出てくると思いますが、「子どもの好みも考えずに無理やり口を開かせて野菜を押し込む」なんて意見は決して出てきません。しかし、学習や生活面など行動に関してはどうでしょうか？子どもの好みやペースなども考えず「やらなきゃいけないこと」「やった方がいいこと」と、工夫もせず半ば強制的に行ってしまうこともあるように感じます。PFSのボランティアは研修や実際の活動の中で、このことを絶えず考え行動してもらうようにしています。だからこそ「何も話さずに隣に座っている」という状況もありなのです。「何かしてあげなきゃ」という気

持ちが、時に子どもを苦しめ追い込んでしまうこともあります。

支援する（教える）立場と支援を受ける（教わる）立場の関係ではなく、ボランティアの立ち位置は「求められたら応える」、求められるまでは、いろいろな工夫やアイデアを考えていくというイメージで捉えてもらえたら嬉しいです。一見受け身に見えますが、この姿勢こそが子どもたちへの強烈なメッセージとして、信頼できる大人として認識してもらえ一番の近道だと思っています。

ここで、ある子どもからボランティアへのメッセージを紹介します。

ぼくは今まで何をやってもうまくいかなかった。勉強も運動も友達との関係も、頑張れば頑張るほど空回りだった。そんな時「待てるから、ゆっくりやりなよ」と言ってくれた〇〇さんと一緒に勉強をしていたら、今まで解けなかった問題が解けた。「ゆっくりやればできるじゃん」と言われて、これまで自分が周りに合わせて急いでやって失敗していたのだと気がきました。「どうしたら早くできるようになりますか？」と聞いた時も、「早くやろうとしなくてもいいよ」と言ってくれました。今では勉強が少し面白くなり、前より早く解けるようになりました。〇〇さん、本当にありがとうございます。

最後に未来を選択するのはその子自身かもしれませんが、自分の将来に対しての不安や諦めを持ってしまった子どもに対して未来を示していくのは大人の責任だと思います。一人ひとりの大人が守るべき子どもへ愛情を持ち見守っていける社会を実現していけたらと考え、これからも活動を続けていきます。

INFORMATION

一般社団法人 愛知PFS協会

〒460-0008 名古屋市中区栄1-26-8-5A

TEL: 052-228-0280

E-mail: info@aichi-pfs.org

URL: http://www.aichi-pfs.org/



ボランティアの皆さんも一緒になって楽しんでいます



体験授業を通じて何を学べたかな？



勉強だってやってるよ

※1:地域社会の大多数よりも貧しい状態

※2:人間らしく生きるために必要最低限の生活水準に達していない状態

※3:名古屋市若年者自立支援ステップアップ事業は2017年8月より稼働